Japan Evangelical Lutheran Association

JELANEWS

ジェラニュース 第23号 2010年11月15日発行 発行責任者 森川博己

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちは、わたしか飢えているときに食べさせ、のどか乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ、はっきり言っておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節~36節、40節



毎年夏に全米で行われるグループ・ワークキャンプに、日本福音 ルーテル教会から8名(松橋、栄光、室園、むさしの、天王寺、札 幌、大岡山、市ヶ谷のJELC教会から各1名)の若者を派遣しまし た。今年はミネソタ州のセント・ルーク教会(パーソン牧師)の若

者12名と行動を共にし、互いに刺激し合うことができたようです。来年の参加者を現在募集中です。ルーテル教会員でなくても、またクリスチャンでなくても、14歳~20歳の青少年なら誰でも参加できますので、ふるってご応募ください。

[この号にはこんな記事が] 難民の第三国定住(山地順子) ……2 リラ・プレカリアと母の安らぎ(戸澤昌子)/この子もあなたの助けが必要です!……3 グループ・ワークキャンプ2010フォトレポート ……4 ブラジル・ボランティだより(中島 涯+原田 愛)……6 日本で農業技術を学んで(ルシネイ・ルイス・テレス)……7 お知らせ(グループ・ワークキャンプ2011募集要項/チャリティ・ワインパーティなど)……8

難民支援の現場から

今年はアジアで初めて第三国定住形式による難 民受け入れが日本でスタートする年です。以下で は、政府内で中心的にこの問題を担当されてきた内 閣官房の山地順子さんに、制度の意義や課題につ いてご紹介いただきます。

難民支援への取組みについて ~より良い協力関係を求めて~

内閣官房副長官補室・山地 順子

第三国定住による難民の受入れ

平成22年9月28日、タイの難民キャンプから、3家族18名のミャンマー難民の方々が、成田空港に到着されました(残念ながら、2家族9名の方々が、お子様の一時的な体調不良により来日を延期されたのですが、この記事をお読みいただいているころには、5家族27名の方々が、皆様そろって日本で元気に暮らしていらっしゃることをお祈りしています)。

この方々は、日本への「第三国定住」を目的として来日されたものです。第三国定住による難民の受入れというのは、本国に帰還することも、避難先の国に定住することもできず、就労や教育の機会に制限のある難民キャンプでの生活を余儀なくされている方々に、第三国へ移住する機会を提供するもので、国際連合難民高等弁務官事務所(UNHCR)も、その受入れを各国に推奨しています。

日本政府は、平成20年12月、閣議了解及び難民対策連絡調整会議決定により、第三国定住による難民の受入れについて、平成22年度からパイロットケースとしての受入れを開始することとしました。パイロットケースについては、年に1回のペースで、1回につき約30人(家族単位)の受入れを3年連続して行い、来日された難民の方々が日本において心安らかに安定した生活を送れているか、また、そのための定住支援及び自立支援が適切に行われているか等について、調査及び検証を行い、その結果を踏まえて以後の受入れ体制等について検討することとしています。この度来日された方々は、パイロットケー

ス第一陣ということになります。

今後、180日間の定住支援プログラム (生活ガイダンス、日本語教育、就職支援 等)及びその後の自立支援を予定していま すが、難民の方々と同じく、私たち政府担当 者にとっても、初めての第一歩です。関係省 庁間の連携はもちろん、地方公共団体やU NHCR等の国際機関に加え、難民支援N GOの皆様方からのご協力もいただきなが ら、難民の皆様方と一緒に、支援体制の整 備・充実について着実に歩みを進めてい けるよう、努力していくつもりです。



成田空港に到着した難民家族たち (右から二人目が山地さん。写真は UNHCR 提供)

日本政府による難民支援への取組み

第三国定住については最初の第一歩を踏み出したばかりですが、振り返りますと、日本政府は、昭和50年に初めてボートピープルが到着して以来、これまで四半世紀以上にわたって難民支援に取り組んできたことになります。昭和54年にはインドシナ難民の定住促進について、平成14年には難民条約上の難民として認定されたいわゆる条約難民に対する定住の支援について、それぞれ閣議了解により方針を定め、定住支援策を講じてきました。

JELAの皆様とのお付き合いも、この歴史と重なり、昭和50年に、難民の方への住居提供について、政府からご相談申し上げたのがきっかけであったと聞いています。以来、難民認定申請中の方々へのシェルター提供や、難民協力懇談会の開催などにより、難民支援に貢献していただいており、この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

難民協力懇談会においては、難民支援に携わるNGO、国際機関、関係省庁等の間で情報交換及び意見交換が行われており、私にとっては、実際に難民の方々と接しておられる皆様方から、様々な立場や角度からのご意見等を聴かせていただける、貴重な機会となっています。

内閣官房の役割

前述の平成14年の閣議了解により、インドシナ難民に限らず、難民をめぐる諸問

題について、政府全体として必要な対応を検討することができるよう、従来のインドシナ難民対策連絡調整会議を改組して、現行の難民対策連絡調整会議が誕生しました。難民対策連絡調整会議は、法務省、外務省、文化庁、厚生労働省等11省庁から構成されており、内閣官房においては、これら関係省庁間の連絡・調整業務を行っています。

冒頭で紹介しました第三国定住による 難民の受入れについては、平成20年の閣 議了解に至るまで、また、その後、今回のパ イロットケース第一陣の来日に至るまで、関 係省庁の担当者とともに、何度も勉強会や 打合せを行い、議論を重ねてきました。こうし た積み重ねの中で築き上げてきた協力関係・ 信頼関係を大切にしながら、引き続き難民支 援に取り組んでいきたいと思います。

より良い協力関係を求めて

「難民支援」と言うと、難民の方々に何か「してあげる」というニュアンスに聞こえてしまいますが、私は、この業務に従事して、むしろ難民や難民支援に従事されている方々から、多くのものをいただいているように感じます。

例えば、条約難民の方々に対する定住 支援プログラムの開講式と修了式に参列 した際には、6か月間での日本語の習得ぶ りに、いつも驚かされます。特に、修了式で は、受講者の皆様が一言ずつ日本語でご 挨拶をされるのですが、短い言葉の中に も、故郷を出て以来、数々の苦労を乗り越 え、常に希望を失わず、努力を続けてこられ た様子が垣間見られます。加えて、誰もが 定住支援プログラムを受講できたことに対 する感謝の言葉を忘れないのです。こうし た姿勢には、自分を省みて、非常に多くのこ とを考えさせられます。

また、第三国定住については、まだ課題が山積していますが、この度来日された方々から、「お米が食べられて嬉しい」「床に座れて安心する」といった、同じアジアの国である日本への受入れ意義について考えさせられるようなコメントをいただき、今後の取組みについて応援していただいているような気持ちになりました。

内閣官房の一担当者としてできることには限りがあると思いますが、このような難民の皆様からのお言葉を励みに、関係省庁のみならず、地方公共団体、国際機関、難民支援NGO、難民ご本人等、多くの皆様方からのご意見に耳を傾け、より良い協力関係の下、来日された難民の方々が日本において希望を見いだすことができるよう、ほんの少しでも尽力することができれば嬉しい限りです。



リラ・プレカリア研修講座は、現在第3期生の研修が行われていますが、第1、2期の修了生は病院やホスピス等で奉仕をしています。この働きを利用されたご家族の方々から感想をお聞きすることができましたので、ご紹介いたします。

私が初めてリラ・プレカリア(祈りのた て琴)のハープと歌をお聴きしたのは、数 年前になります。「東京老人ホームめぐみ 園」(以下、めぐみ園)で平安な日々を過ご している母の居室でのことでした。キャロ ル・サック先生とこのプログラムの研修生 の方が訪問されて、ハープと歌による賛美 の恵みを与えられました。心にしみる旋律 でお部屋は静かな平安に包まれました。め ぐみ園での母の日々は、園の皆様の手厚い 介護と守りのなかで穏やかに過ぎておりま す。今年92歳になる母は、幾度かの病の 発症により、数年前から身体的自由を失っ ております。お食事は車椅子上で職員の 方々に時間をかけて介助していただき、 ベッドにあっては、人の出入りや呼びかけ には目を開きますが、ほとんどの時間は閉 じております。

はじめて母の居室で流れたハープと歌の賛美は、母の呼吸に添うような静かな旋律でした。その優しい満たしの中で、母は柔らかい表情で時折瞼を開き、また心地よく夢の世界に入っていたようにも見受けられました。その日は、母と私が在籍する教会の牧師様と姉妹も病床祈祷に訪問しておられ、共にハープと歌による賛美の恵みを賜り、癒しの幸を心から感謝いたしました。そして今もリラ・プレカリア研修講座を修了なさった方々のご奉仕でハープと歌による癒しの時をいただいております。

不自由な身となり、発語も不可能な母からは祈りのたて琴への思いを聞くことはできません。が、その時間にあるときの母の表情には、癒し、安らぎ、そして全てを神様にお委ねすることへの平安を感じます。以前、介護に従事なさる方が「身体の機能が弱っても、聴覚は最後まであるもの」と語ってくださいました。人は命ある限り優しさ、

温かさ、静けさ等は、魂への安らぎの響きとして伝わるように感じます。健常な頃の母は、信仰生活に感謝しつつ、賛美によってあふれる恵みと、また時には慰めをいただいておりました。その母がリラ・プレカリアの心地よいハープと歌の音色で安らぎの表情に在る姿を見て、私に与えられた御言葉があります。

「主よ、あなたは後ろからも前からも、わたしをつつみ、み手で私を守られる」 詩編 139:5

毎年秋に開催されるめぐみ園の「いきいきさんデー」でも、ハープと歌をお聴きすることができました。その時に在宅ホスピスケア施設「きぼうのいえ」でも、リラ・プレカリアの働きが行われていることを知りました。そしてそれが、「きぼうのいえ」に入居しておられる方々が天国へ向かわれる時に、平安な旅立ちへの看取りのお働きであると聞きました。映画「おとうと」では、ベッドサイドでお祈りをこめてハープと歌を奏でるキャロル・サック先生の後ろ姿が、魂の安らぎへの働き人として私の心に刻まれました。

ホスピスで、施設で、また様々な場所で、 癒しと慰めを必要としている方々に、キリストの愛と香りが届けられますように。その担い手としてのリラ・プレカリアのお働きに、 ますます神様からの祝福が注がれますようにお祈りいたします。

感謝をこめて

※リラ・プレカリアはまだまだ開拓中の働きで、 修了生の人数も奉仕を依頼してくださる方の 数と比べると足りていない現状なのですが、そ れでも少しずつですがベッドサイドでハープと 歌を奏でています。

戸澤様のご家族、めぐみ園の入居者や職員の 方々、そして修了生のためにお祈りいただけれ ば幸いです。

この子もあなたの助けが必要です!



インド支援地病院に医療機器搬入のお世話をした JELA は、2009 年 12 月に続いて今年 8 月にも医療専門家 2 名(産業医科大学・春木伸彦医師、箱崎教会会員・河野精一郎医師)を派遣し、2 回目のエコー(超音波診断装置)操作訓練を実施しました。ジェラニュース 21 号でご紹介した、1 回目の竹内正明医師(産業医科大学)による訓練時に心臓の病気が発見された Vaishnavi ちゃんは無事手術を終え、元気に暮らしています。皆様のご協力、お祈りを感謝します。

今回も別の子どもに心臓の問題が発見されました。その子は Shivani という名の2009 年 6 月生まれの幼女で、命を救うためには手術が必要です。

Shivani ちゃん一家は貧しく、約30万円の手術代の工面ができません。父親は麦畑で働く農民で、その稼ぎは1日2百円以下です。自己所有の土地を売ったとしてもお金が足りません。Shivani ちゃん一家は病院から5キロ離れたところにある、Khandavi という貧しい村で暮らしています。ここは長期にわたり干ばつの被害に見舞われた地域です。

自分の状態を知らずに Shivani ちゃんは、無邪気によく笑っています。「毎日何がしたい?」と尋ねると、「犬が好き、牛と遊ぶの」と元気に答えます。家にはペットの犬が一匹と牛もいるとのことで、一家は牛からしぼったミルクを毎日飲んでいます。

JELA は Shivani ちゃんと家族のために 寄付金を募ります。皆さまからお寄せいた だく寄付は、Shivani ちゃんや彼女と同じよ うな重い心臓病があるのに貧しくて出術で きない子どもたちのために用いさせていた だきます。

グループ・ワークキャンプ2010Photo Report

1977年、米国コロラド州を襲った大洪水の被災者を支援するために、地元のキリスト教青年書専門出版社「グループ」がボランティアを募り、全米から集まった300人により始まった、貧困地区の家屋修繕と賛美集会を組み合わせたグループ・ワークキャンプ。現在は全米・カナダ及びその周辺の50以上の地域で開催され、様々な教会・教派の青年が毎年全部で数万人参加しています。クリスチャンでなくても参加できますが、全てのプログラムがクリスチャン向けに計画され、信仰を育む目的で作られています。

今年日本から参加したキャンプは、7月22日から8月5日まで行われ、ホームステイは元在日宣教師デービッド・パーソン牧師が牧会するミネソタ州のセント・ルーク・ルーテル教会のお世話になりました。セント・ルークの若者と共に参加したキャンプはイリノイ州セントラリア市で行われ、全米、カナダやバハマから集まった400人の青年と共に奉仕と分かち合いの時間を持ちました。

参加者のひとこと



(横井里月/JELC 松橋教会・14歳)

最初に作業仲間のみんなと会った時、骨折で自分は限られた仕事しかできないのが不安でした。でも、言葉が通じなくてもみんな助けてくれました。 この出会いに感謝します!



(西川明希 /JELC 栄光教会・18 歳)

初めは古びた階段崩しから始まり、スロープを作る場所を確保しました。完成が近づくと、車椅子が通れるようなスロープの形が見えてきて、力を合わせることの大切さを感じました。



(西崎尚実 /JELC 室園教会・14歳 左から二人目)

水曜日のテーマは「家族」でした。部屋に戻ると、セント・ルークの人たちの何人かが泣いていました。家族に電話をかけて今までのことなどを謝って 泣いていたそうです。彼女たちの涙はすごく私にとって重いものでした。



(針田真由子 /JELC むさしの教会・14歳)

はじめは日本人ひとりでとても不安で一杯だった気持ちが、いつのまにか、言葉が通じなかったみんなととっても仲良くなり、心が通じ合えることの素晴らしさに心が喜びで満ちていました。



(後藤由起 /JELC 室園教会牧師)

一日の作業が終わって片付ける際、私はペンキのべったりついたローラーをどうやって片付けるのかを、リーダーに尋ねました。そうすると彼は、それを手でとって先端を捨て、ローラーを洗うように指示しました。私は正直、しり込みしました。汚いものを触りたくない、手が汚れる、と思ったからです。しかしながらその時、神様から示されたのはこういうことでした。私たちの心の奥底のどんなに汚れた部分、時にはその存在を私たち自身見ようとせず、認めたくないようなところまでも、神は受け止めて清めてくださるということです。自らを低くし、イエス・キリストは汚れたこの世に来てくださったということを示されたとき、私はこの神を自分の人生において第一とすると神様に約束しました。



(北川桃子 /JELC 天王寺教会・15歳)

初日、私史上初めての静かな7時間でした。みんなの英語が何ひとつ理解できず、怖くて黙っていました。宿泊施設に帰って日本人の仲間に会った瞬間、泣いてしまいました。彼らは私のすべてを受け止めてくれました。それがとても嬉しかったです。



(松岡然一郎 /JELC 大岡山教会・16 歳)

日が経つにつれ、アメリカ人の仲間が日本のことを知るうとしてくれたり、 僕に興味を持ってくれたり、話かけてきてくれたのが嬉しかったし、僕自身も もっと相手のことを分かりたい、自分を知ってほしいと思うようになりました。



(近藤莉子/JELC札幌教会·16歳)

全体を通して、私は自分と向き合い、神様に近づこうという気持ちが持てたと思います。今まで当たり前に感じていたものに感謝すること、そしてどんな時でも神様は私と共にいてくださり、支えてくださることを学びました。



(富井杏奈 /JELC 市ヶ谷教会・17 歳)

自分から話しかけていくうちに、アメリカ人の奉仕仲間から話しかけてもらえるようになりました。汗だくになってペンキを塗りながら、 "good job"と言葉をかけ合って、みんなが笑顔でした。



ボン・サマリターノ訪問記 中島 涯

●施設概要

BomSamaritano はブラジルのリオデジャネイロにある施設で、新しく出来たイパネマの駅から徒歩で1分。ひとつのビルに教会、施設、牧師の家やゲストルームがあり、施設としては1階と2階を使って活動しています。施設の子ども達は2歳~6歳で4クラスに分かれており、日本で言う制服(ユニフォーム)を着て過ごしています。ユニフォームは施設に入る前に保護者が購入しなければいけないそうで、値段はジャージ上下にTシャツ短パンで5千円くらいだそうです。

活動時間は次のようになっています。朝8時=登園、8時半=朝食、9時=お絵描きや制作、9時半=シャワー、10時=外遊び、11時10分=お昼ご飯、11時45分=お昼寝、15時=おやつ、15時半=遊び、16時半=帰園。



●子どもたちとのふれあい

僕は3、4歳クラスの子どもたちと過ごす 機会をいただき、子どもたちとふれあいなが らお話を聞くことが出来ました。

朝食後、クラスの一人ひとりが僕に自己 紹介(名前と年齢)。恥ずかしがりながらも、 自分の名前と年齢を教えてくれました。可愛 く面白いと感じたことは、年齢を示す数字とそ れを指で示したものが合っていないところで した。まだ覚えている途中だそうです。

その後、皆でお絵描き。描くテーマは自由で子どもたちはロケットを描いたり、シュレック (アニメのキャラクター)を描いて僕に見せてくれました。みんな席を立たず、「お利口なんですね」と先生に話すと、「2ヶ月前までは誰も座らなかった」との返事。苦労したとのこと。



先生と親との連絡帳があり見せていただきました。施設からの連絡事項が貼ってあるぐらいで、親からの連絡事項が書いてあることはほとんどありませんでした。理由は親が字が書けない、また読めないとのことでした。

●子どもでも出来ること

お絵描きが終わり、子どもたちはシャワーの時間。家でシャワーを浴びる家庭が少ないので、施設では毎日シャワーを浴びるようにしているそうです。ここで驚くことがありました。子どもたちがみな靴を並べ、自分で洋服の着脱が出来ることです。ブラジルの施設では珍しいと思い、子どもの教育をしつかりとしているんだなと感心しました。子どもが「○○して~」と言っても手伝わず、子どもにさせると言っていました。基本的なことですが、これが一番大切なんですね。



シャワーをすませた子どもから、施設内 にある園庭でサッカーやブランコ、鬼ごっこ など、各自が自由遊び。その後、皆で輪にな り歌を歌い、動物のモノマネやボール遊び をしました。

お昼ご飯。メニューはフェージャン(豆料理)、お米、サラダ、卵。皆食べ残しをせず全部きれいに食べていました。

お昼寝前の歯磨きも、ちゃんと自分たちで

していました。先生が子どもたちを手伝うことはなく、基本的に子どもたちが自分自身で何でもしていました。ここまでを2ヶ月間で教育することはとても難しいこと、さすがだと感心しました。ちなみに、このクラスの担任の先生は、30年この施設で働いているそうです。

●子どもたちのためにできること

ブラジルに来て色々な施設を訪問しました。それぞれの施設に良い面や悪い面がありますが、サンパウロ、リオデジャネイロの施設は特に子どもに対する将来のプロジェクト(教育)がしっかりしていると感じました。ファヴェーラ(スラム街)で育つ子どもたち。決して環境が良いわけではなく、正直悪い環境の中で育っている子どもたちが施設に来ることで、自分自身で何でも出来るようになる。施設として本当に良い活動をしていることを再認識しました。

カーザマテウス訪問記

原田 愛

●施設と子どもたちの厳しい現状

7月19日~23日にサンパウロを訪問しました。カーザマテウスでは、通常の授業ではなく Projeto Ferias (冬休みプロジェクト)といった特別授業を行っていました。私がいない間に、子どもの半数が変わってしまいました。施設利用の登録を希望する子どもたちが多いにもかかわらず、すべての子どもを受け入れられないという現状があります。ケアの必要度の高い子どもから登録されていくシステムのため、昨年いた子ども今年は継続できないということも多いのです。継続して活動を続けていくことは、子どもたちの健全な成長を見守っていくために重

要なことであると思います。また、せっかく登録しても欠席が多いというケースもあります。保護者と協力して子どもたちが欠席しないように促すこと、また地域の子どもすべてを受け入れられる施設にすることの必要性を感じます。

●半年間の変化

私がリオに移動してからの半年で、カーザマテウスで変わったことを先生たちに聞いてみました。

カポエイラ(ダンス、武術、音楽を交えた 伝統芸)では、一番年上のクラスが半数以 上もメンバーが変わり、一から教えなおしに なってしまい、去年までのレベルが保てなく なってしまったようです。レベルが下がってし

まったことにより、去年までのメンバーのモチベーションが下がってしまうということもあるようです。しかし、去年卒業したメンバーがボランティアとして参加する等の、良い交流も行われているようです。

コンピューターの授業では、担当の教員が病気のため長期休養していて、またアシスタントも出産のため退職し、新しい教員を探しているということでした。今回は臨時の教員が授業を行っていました。

コーラスでは、昨年の素晴らしい 活躍により、年齢に関係ない特別グループ を作る予定でしたが、昨年のメンバーが集 まらず、結局また一からやり直しだと話して いました。CD を作る話もあったのですが、 流れてしまったようです。

また、図書室は、昨年と同じくアパレル企業 からの援助が決まり、職員と研修生の給料 が保証されたという喜ばしい報告が聞けま した。たくさん新しい本が入荷され、地域の 人たちでにぎわっていました。

一番大きく変わったのは、ソーシャルワーカーが入ったことです。この必要性は私もずっと感じていて、私がカーザマテウスで活動し始めたころから、採用が考えられていたにもかかわらず、今年度からの採用になりました。家庭訪問などは、このソーシャルワーカーの仕事となり、より深い関係が子どもたちの家族、また地域とも結べるようになりました。専門的知識や技術を使い、政府の援助を得られるように計らったり、相談にのっているということでした。今後は親同士の話し合いの場を作り、互いに理解し合い、励ましあって状況を変えていけるようにしていきたいと話していました。

●ボランティアと共にできること

カーザマテウスの冬休みプロジェクトで 印象に残ったのは、ドイツ人ボランティアの アニカの最後の授業でした。彼女は一年の 奉仕を終えドイツに帰っていきましたが、こ の授業で彼女は、ドイツと彼女の家や家族 を写真やビデオで紹介し、ブラジルとドイツ の違いなどを子どもたちと話しあいました。 そのあと、彼女の出身地であるブレーメンの 童話「ブレーメンの音楽隊」を読み聞かせ ました。子どもたちは、今まで何人もの外国 人ボランティアが来たため、このような授業 には慣れていますが、家族や家、学校など の写真に興味を持っていました。外国の子 どもたちがどのような生活をしているのか、 身近なものを見せることで、イメージがわき やすいのだと思いました。



ドイツ人ボランティア・アニカさんとクラスの子どもたち

また、中島涯さんの日本文化紹介の授業もみることができました。折り紙とビーズを使って、くすだま作っていました。彼の明るい人柄で、とても雰囲気の良い楽しい授業でした。同じ授業をしても人によって雰囲気がずいぶん変わるものです。彼のアイデアや明るさにはいつも刺激を受けます。カーザマテウスの職員も彼のことをとても良く話していました。同じボランティアとして、私ももっとできることがあるのではないかと、考えさせられました。

最後の金曜日のよるにはアニカの送別 会が行われ、職員や彼女の友人が集まり ました。彼女とは、半年間一緒に働き同じ ボランティアという立場から、常に一緒で いろいろな話をしました。アニカは、明るく て純粋で、とても活動的な人です。彼女の 存在が刺激となり考えさせられることもた くさんありました。送別会は彼女自身が企 画したもので、彼女の感謝の気持ちがつ まったものでした。そしてたくさんの人が 集まりました。彼女が帰ってしまってとて も寂しいですが、彼女がしたように、私も ブラジルの人の心に何か残して帰れるよ うに頑張りたいなと思いました。

日本で農業技術を学んで

アジア学院留学生 ルシネイ・ルイス・テレス

◆自己紹介

私は、ブラジルから来た Lucinei Luiz Telles (ルシネイ・ルイス・テレス) と申します。21 歳です。この一年、アジア学院(栃木県)で農業技術を学んできました。ブラジルでは、土地を持っていない貧しい農民を助ける、社会正義のための組織に籍を置いています。

◆一人の神父との出会い

わたしが日本に来るきっかけを作ってくださったのは佐々木治夫神父です。ブラジルのロンドリーナ地域に定住している日本人カトリック教徒のために2人の司祭を派遣したいというバチカンの要望を受けて、佐々木神父は1957年に日本カトリック中央協議会からブラジルに派遣されました。

1977 年に神父はフマニタス慈善協会を 設立し、皮膚病、ハンセン病などの患者の 治療を開始し、以来、4万人以上の患者が 無料で治療を受けてきました。しかし、治療 以外にもこの地域は他の面で大きな助け を必要としていました。その一つが農業でし た。土地がなく、飢えに苦しむ農民がいる一 方で、土地を勝手に所有していた大地主が いたため、神父は 1995 年にわたしが所属 する組織に支援を要請しました。それ以来 わたしたちは、この地域に住んでいる家族 の生活の質を向上させるために協力し合 い、努力してきたのです。このパートナー シップの働きで、今日ではパラナ州サポペ マ市に農業専門学校が設立され、農家の 子どもたちに無農薬の安全な農産物を生 産する技術を提供しています。

◆アジア学院での学びの意義

私は佐々木神父に感謝を捧げます。また 日本で研修する機会を与えてくださった JELA にも感謝します。意義深いアジア学 院での研修は、私たちの農業学校やコミュ ニティ、そして土地なし農民の支援に大きく 貢献するだけでなく、「助けを必要とする 人々に尊厳ある生活環境を」という目的の もとに形成してきた世界の農民との関係を ますます堅固にするために役立つものと確 信しています。今回の研修で、すでに良い実 が得られていますが、今後も、アジア学院で 得た経験を様々な形で共有し続けるつもり です。そして、アジア学院のコミュニティで共 に生活している、アジア・アフリカからの 20 カ国以上の研修生から、引き続き多くの ことが学べることを期待しています。

2011 年度グループワークキャンプ参加者募集

以下の要領で参加者を約 10 名募集 します。申込期限は 2011 年 1 月末日(必 着)です。

- ◆派遣期間:2011 年 7 月 21 日 (木) ~8月4日(木)
- ◆内 容:ミネソタ州でのホームステイとワークキャンプ(家屋修繕、聖書の学び等、参加者の信仰的・人間的成長を促すプログラム)に参加。
- ◆参加費用:22万円(パスポート取得 費用及び海外旅行保険費用は別途自 己負担)。
- ◆問合せ・申込用紙請求先: JELC+JELA ボランティア派遣委員会 住所:

150-0013 渋谷区恵比寿 1-20-26 日本福音ルーテル社団 (JELA)気付

電話:03-3447-1521 ファックス:03-3447-1523

E-mail: workcamp@jelc.or.jp

◆選抜方法:2011 年 1 月末日までに 到着した申込書の中から派遣者を決 定し、2月中に派遣の可否を申込者に 連絡します。

<注意事項>

!201 1 年 8 月 1 日現在の年齢が 14 歳~20歳の方が応募できます。

- "ルーテル教会員でなくても、クリスチャンでなくても参加できますが、聖書を 学び話し合う時間が毎日あり、すべて の行事に積極的に加わることが求められます。
- # 牧師等数名の日本人成人が同行し、 霊的・言語的側面から日本人参加者 を支えます。
- * 米国の主催団体との手続きに時間が かかるため、申込期限が1月末日に なっています。
- %派遣確定通知受領から出発までの間にキャンセルされる場合は、その時点ま

でに発生した費用をいただくことがあります。また、諸般の事情により、日本からの派遣を中止する場合があることをご承知おきください。中止の場合は、決定日以降なるべく早期にご連絡いたします。

- & 派遣確定者にはパスポートが必要となります。お持ちでない方、期限切れの方は確定通知を受領後、なるべく早期にパスポートを取得しておいてください。
- 、派遣確定 者には、日本福音ルーテル教会が毎年 3 月下旬に実施している青少年向けキャンプ「春の全国 Teensキャンプ(=春キャン)」への参加をお勧めします。教会になじみのない方は、クリスチャンのキャンプを体験しておくことが望ましく、米国に行く仲間どうしが出発前に親しくなる機会でもあります。「春キャン」の詳しい情報は、米国派遣決定通知送付の際にお知らせします。

お知らせ

一日神学校で「アジアこども支援 一インド編」をテーマに出展!

9月23日(祝)にルーテル学院大学・神学校にて「一日神学校」が開催され、JELAは「アジアこども支援―インド編」としてブース参加をしました。JELAの支援先施設 CRHPの新たな活動「HHP(学校に行けず、家族を養っていかなければならない10代の女の子たちを支援するプロジェクト)」で女の子たちが作った手作りアクセサリーやクッションカバーなどの色とりどりの雑貨と、インドでは定番のスパイスの効いたミルクティー(マサラ・チャイ)を販売しました。支援先と皆様を結ぶきっかけになればと、インドー色に染まったブース参加となりました。売上金は一部「HHP」に寄付されます。



「チャリティ・ワインパーティ」の おしらせ

12月3日(金)午後6時半からジェラミッションセンタービル1階にて、世界の子ども支援のための「チャリティ・ワインパーティ」を例年どおり開催します。ワイン以外の飲物と食べ物もご用意します。参加費は2千円です。当日会場にてお支払いください。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。

支援者一覧

(2010年6月1日~9月30日)

青木孝士/石崎勝/石戸玲子/伊東節子/内田 フミ子/江澤妙子/大塚眞佐子/大中真理/亀 井美代子/京谷信代/倉重ミドリ/小菅裕司・ 可代/児島和子/佐藤義雄/崎山たまも/島宗 正見/杉浦りえ/鈴木辰典/鈴木律文/関口佳 子/高橋悠美子/高橋ふく子/高田紀子/瀧原 哲/東郷優子/中川陽子/中村桂子/日本福音 ルーテル釧路教会/日本福音ルーテル玉名教会 日本福音ルーテル田園調布・雪ヶ谷教会合同 CS 夏期キャンプ/芳賀美江/早瀬康平/平林洋 子/古川知代子/古川博子/古庄理世/宮澤真 理子/牟田青子/森田雅子/八坂由貴子/矢島 秋仁/山際喜佐夫/山県順子/山本了/横山恭 子/吉田員子/若原奇美子/渡辺聡/Eric Hanson / Kenneth Dale / Patrick Bencke / The Lutheran Church of the Good Shepherd 他匿名複数

以上、敬称略。ご支援ありがとうございます。 匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下 さい。

編集後記

高校生の娘の中間・期末テストに時事間 題が毎回出題され、頼まれもしないのに予想 問題を作ってやっている。これを書いている 10 月下旬現在でホットなニュースは、ノーベ ル化学賞受賞の日本人2名(受賞理由も重 要?)、チリのサンホセ鉱山の33名救出劇、尖 閣諸島をめぐる中国と日本の攻防、大阪地検 特捜部による証拠 FD 改ざん事件、生物多様 性をめぐり名古屋で開催された COP10 …… と想をめぐらしていく中で、「タイのメーラー・ キャンプからミャンマー難民を日本に受け入 れるアジア初の第三国定住」も落とせないと感 じた。難民に冷たいと言われる日本の現状を 打破する試みとして、まずは評価したい。そし て、この機会に認定難民やインドシナ難民、そ して難民申請者の方々の保護に関するシステ ムが整備され、日本が難民にとって少しでも住 みやすい国になるようにと願っている。(M)

